
恋の道も一歩から

葛城子奈々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の道も一歩から

【Nコード】

N0973H

【作者名】

葛城子奈々

【あらすじ】

日々をなんとなく過ごしている16歳の乙女の物語。新年度が始まり、大好きな男の子の隣の席に！仲良し3人組との学園ラブコメディ。

第1話 新年度（前書き）

この物語はフィクションです。
登場する人名、名称などは、実際とは関係は御座いません。

第1話 新年度

〔第1章〕 武君と私

2年生になり、クラス替えがあつた。

私は都立第2高校に通う16歳の恋する乙女です。

今日は2年生になった初日だ。

とは言え、もう既に誰がどのクラスになったのかなんて、皆知つて
いるのだ。

でもでも、憧れの武君と同じクラスに慣れたのは正直ラッキーです。

「うん、ついてる私。」

なんて、昨日の帰り道に一人で浮かれていたくらいです。

し・か・も、なんと、隣の席なんです。

もしかしたら私、一生分の運を使っちゃったんじゃないのかな？

でもね、仮に一生分の運を使ったとしても、彼の隣に座れる私は幸
せ者ですね。

なーんて言っている横には武君が居るんだよね。よしっ。

武君はバスケット部で、身長が高くスリムな体型で、カッコ良い。

今は、他の学校の女子と付き合っているみたい。

学校の中でも、女子には人気がある方なのかな？

私のウヌボレかも知れないけど、私には結構優しいんだよね。

それが、私のハートを掴んでやまないのです。

先生が入ってきた。

「おはよう。昨日までは1年生だったお前らも今日から2年生だ。
これからは

受験勉強に向かってしっかりと準備をしておかなきゃな。ん？

まあ、受験しない奴はしない奴で、それなりに頑張るんだ。」
うう担任は田口なんだよね。

田口和也、31歳独身、中肉中背で、顔は・・・まあまあかな。
女子の中では結構人気がある先生なんだよね。

しかし何なんだ、この無責任な大人の発言は？

そんな私の反論には気が付きもせず、田口はホームルームを続ける。
私は、隣の武君の事が気になって、ほとんど話を聞いていない。

「聞いているのか？葛城。」

びつくりした私は、つい立ち上がってしまったのです。

そんな私を見て、クラスがどっと笑った。

「おい、大丈夫か？今からそんなことじゃ、先が大変だぞ！」

田口は、注意するでもなく、皮肉でもなく、さらっと言った。

「あつ、すみません」

謝る私を見て、武君も笑っていた。

又やってしまった。

私は、通常の人間よりも妄想力が強いらしい。

考え事していると、自分の殻を作ってしまう様だ。

ホームルームが終わると、又教室が騒がしくなる。

今日の1時間目は科学だ。

きんこんかきんこん

一通り午前中の授業を終え、お昼ごはん。

私がお弁当を出して食べようとしていると、麻衣子と静江がやってきた。

「子奈々、朝から武君見てたんでしょ。」

鋭く突っ込んでくる麻衣子に、私はとっさに隣を見た・・・

「大丈夫、武君なら購買部に行ったよ。」

悪戯っぽい笑顔を見せながら、麻衣子が言った。
ほっ……いつもながら麻衣子には驚かされる。

「まーちゃんは子奈々の事になると意地悪なんだから。」

静江はそんな事を言いながら、武君の机を動かして来て私の隣に机をくつつけた。

「静江それは……。」

「いいじゃん、いいじゃん。別に減るもんじゃないでしょ。」

私と麻衣子と静江は、こんな感じの仲良し3人組です。

武君と同じクラスになれたのは幸運だけど、

麻衣子と静江と一緒にになったのは、もう腐れ縁としか言い様が無い。

新谷麻衣子16歳。同じ演劇部の仲間である。

家はお金持ちで、高級マンションに住んでいる。何やらお父さんが

某会社の

役員になっているとの事だ。

続いて神埼静江16歳。この子も又演劇部の仲間なのだ。

静江と私は麻衣子に半ば強引に演劇部に入部させられた形だ。

静江は、ごく一般的な家庭の一人娘で、正確はおとなしいのだが、
度胸はある。

お昼ごはんを食べながら、私はついつい武君を探してしまう。

そんな私の様子を見て二人は笑う。

心地が良い。

こんな時間が何時までも続けば良いな。

そんな事を漠然と考えていると、麻衣子が私のお弁当箱から
たこさんウインナーを盗んで行った。

私も負けじと麻衣子のお弁当を盗もうとするが、空振り。

私がかめつ面をしていると、武君が帰ってきた。

「おーいー、神崎いー。オレが飯食う所無いじゃんよー。」

ふて腐れ気味の武君に、私がおめんねと言う寸前に

「いーじゃんいーじゃん減るもんじゃないしさ。何なら私の机使いなよ。」

麻衣子が言った。

「それは私のせりふですう。」と静江。

「オツケー。」

と言って武君は行ってしまった。

ふて腐れ気味の私を見て、静江がくすくす笑う。

「笑い事じゃないって。」

怒る私に、「まあまあ」となだめる二人。

これからは、武君と同じクラス。

麻衣子と静江も同じクラス。

私は満足していました。

続く

第1話 新年度（後書き）

はじめまして、葛城子奈々と申します。

完全なるド素人が一念発起で書き始めた物語です。

至らない点など御座いましたら、ご指摘をお願い致します。どうか暖かく見守ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0973h/>

恋の道も一歩から

2011年1月1日02時48分発行